**「子どもはみんな問題児。を読んで」**

荒井　里奈

この、「子どもはみんな問題児」を読んで、中川李枝子さんの長年の保育士経験と、母親として感じられたエピソードが書かれており、読んでいてとても共感できる面と、考えさせられる面が一つ一つの項目の中に多くありました。

　その中でも印象に残ったのは、第2章の“子どもはすばらしい先生です“の中にある、子どもの「心」を大事にして欲しい。という言葉でした。幼稚園教諭として、これは当たり前に出来なければいけないと思いますが、何気ない子どもの会話に、その子の願いや不満が隠れていると記してあり、改めて心に留めておきたい言葉でした。改まって話を聞こうとするのではなく、常に耳を傾けることが大切だと感じました。何気なく聞いていた話が、後になって点と点で結ばれるような経験も今までにあったので、とても納得させられる言葉でした。

　又、第4章には本について多く書かれており、毎日の読み聞かせを思い出しながら読んでいました。私自身、幼い頃は母に沢山の絵本を読んでもらっていました。その時間はとても幸せな時間だったことを覚えています。そんな気持ちを子ども達に味わってもらえているかは、まだ自信はありませんが、今まで見てきたどのクラスも、絵本の時間が大好きで、前のめりになって絵本の世界を味わっている子ども達と一緒になって私も楽しんできました。今年は、初めて年少担任を持ち、最初の頃は絵本を読んでいても聞く耳を全く持たない子がいたり、興味が無く遊び始めてしまったりと、こんなにも聞かないものかと正直驚きました。その中で、どんなものであれば皆で楽しめるだろうかと試行錯誤しながら毎日絵本を読んでいくと、今では少しずつ興味を持つようになり、半日保育などで絵本が１冊しか読めない日には“なんで？もう１つ読んで”と、ねだる程絵本を好きになってもらうことができ、とても嬉しく感じました。家庭では出来ない、クラスのみんなと1つの絵本を一緒に楽しむことが出来る貴重な時間をこれからも大切にしていきながら、良い絵本に沢山出会えるよう、私自身も更に勉強したいと感じました。

最後に“いいお母さんは、こどもの喜びに敏感です“と書き記してありました。子どものことをしっかり受け止めること、約束を破らないこと、愛情をしっかり態度で示すこと。と読んで、これは私たちにも共通だと感じました。常に子どもに寄り添う気持ちを持って接することで信頼関係も更に深まり、子ども達にとっての安全地帯を築いていくことが出来ると感じました。子ども達にとって、先生という立場は、家族の次に多く関わる存在であり、幼稚園の生活が子どもにとって大きな影響を与えると思っています。だからこそ、私たちは責任を持って一人一人を理解し、安心して過ごせるような環境を作っていかなければならないと感じました。

子どもたちにとって何が幸せか、今何を教え、伝えていくべきなのかを、考えながらこれからも一人一人に寄り添って保育をしていきたいと強く感じました。